

日本人エリートサッカー選手の アジアへの国際移籍とキャリア形成

高橋義雄* 佐々木康**

I 緒言

近年、海外のサッカークラブに移籍する日本人サッカー選手が増加している。また移籍先は、ヨーロッパ、北中米、南米などに加えて、アジア諸国など多様な国々となってきた。さらに吉田(2014)は、「サッカーでつながる日本とアジア」として東南アジアで指導する日本人サッカー指導者の増加を紹介している。そして彼ら日本人指導者が東南アジアで活躍する理由として1990年代に日本サッカー協会が指導者養成システムを整備し、日本の指導者のレベルが格段と上がったことをあげ、東南アジアのサッカークラブがJリーグのクラブと提携できる理由に日本の指導ノウハウがあることを指摘している。

これまで高橋(2004)は、日本人サッカー選手の海外移籍について先行研究の分類を用いてその要因の分析を行い、日本人サッカー選手は多様な要因によって国際移籍を決定することを明らかにしている。またJリーグ選手のセカンドキャリアについて分析するなかで、アスリートの主体的な活動の活発化は、アスリートの中に社会とのつながりを持とうとする意識が芽生えつつあることを指摘している。(高橋(2011))。

さらに高橋ら(2012)は、日本人スポーツ選手のキャリア形成に及ぼす国際移籍の影響について、海外移動に至った経緯や要因によって、スポーツキャリアの延長や社会的ステータスの獲得に働くケースがあるいっぽうで、国内とのネットワークが途切れることで、帰国後のキャリアに影響する可能性も論じている。

日本人エリートサッカー選手の海外移籍は主に1980年代からはじまる。そのため初期に移籍した選手の多くは日本を代表する選手であり、先駆者として帰国後もサッカーに関わるなど、セカンドキャリアに関する問題は論じられていない。いっぽうでJリーグ開幕以降に海外移籍した選手の年齢は、40歳代後半に差し掛かっており、1990年代以降に海外移籍したサッカー選手のセカンドキャリア問題は今後顕在化してくることが予想される。特にパフォーマンスの高さから欧州のクラブに移籍して大金を得た事例と異なり、アジア諸

国への移籍の場合は日本のJリーグで契約が取れずにそれでも契約を取るために渡った事例が中心である。

本研究では30歳以上になってもアジアのサッカークラブでプレーする選手と20歳代前半でこれからサッカーのより高みを目指す選手を対象とする。そしてタイ、シンガポール、香港のクラブに移籍した日本人サッカー選手が、海外移籍経験から何を学び、どのような成長を遂げるのかについてキャリアの視点で検討し、日本人サッカー選手のアジアのクラブへの移籍と彼らのキャリア形成について考察することを目的とする。

II 方法

本研究は、2012年及び2013年に現地を訪問し、日本人選手に対してインタビュー調査を実施した。まず、2012年は予備調査としてアジアに移籍したサッカー選手・指導者の概要を把握するためにタイに在籍する選手や指導者にインタビューを実施した。さらに2013年には香港、シンガポール、タイに移籍した選手にインタビュー調査を実施した。調査は、2012年はJリーグアジア戦略室、2013年は在籍するクラブの協力を得て実施した。なお、本研究ではインタビュー対象者を匿名化したが、現地での日本人選手や関係者が極端に少ないため、匿名性が担保できないことも考えられるため事前にその可能性についても説明を行い、研究協力の了解を得た。

1. 2012年調査

1.1 予備調査

アジア諸国に海外移籍する日本人サッカー選手の情報収集、特にJリーグアジア戦略室の動きについて調査した。また2012年2月15日～18日にタイを訪問し、タイに海外移籍した選手5人、タイのサッカークラブコーチ1名、タイの女子フットサル選手1名と懇談し、タイに移籍した選手の背景や現状の生活など予備調査を行った。懇談した選手のプロフィールは表1の通りである。

1.2 2012 年インタビュー調査

2012 年 3 月 13 日にタイのサッカープロリーグに所属経験のある H（表 1 最下部）にタイへの移籍とそれに必要な選手の資質について東京でインタビューを行った。

表 1. 2012 年に懇談・インタビューしたタイクラブ移籍選手のプロフィール

氏名	所属チーム	役職	主な経歴
A (37)	タイポート FC	選手兼コーチ	J1-J2-JFL
B (31)	バンコクグラス FC	選手 3 年目	J1
C (30)	バンコクグラス FC	選手 4 年目	J2
D (38)	ラバチャ FC	選手 2 年目	JFL-J2
E (21)	シラチャー FC	選手 3 年目	日本の経験なし
F (不明)	チョンブリ FC	コーチ 6 年	特になし
G (30：女性)	スアンロン・プレー UNITED	選手 1 年目	JEF Ladies
H (38)	タイプレミアリーグ引退		J1-J2-JFL

※選手氏名の後の数字は当時年齢

2. 2013 年インタビュー調査

2013 年 2 月 26 日～3 月 3 日において香港、シンガポール、タイのそれぞれの国のトップレベルのサッカークラブに移籍した日本人選手 7 名（内 1 名は引退し現在は現地でコーチ）、および香港とシンガポールのサッカークラブ経営者 2 名、タイのサッカークラブでセールス・スポンサーシップマネージャーとして勤務する 1 名の日本人にインタビュー調査を実施した。質問項目を事前にメールにて送信し、当日はそれを基にインタビューの趣旨を説明し、半構造化面接を実施した。インタビュー対象者のプロフィールは表 2 の通りである。

表 2. 2013 年のインタビュー調査対象者のプロフィール

氏名	所属チーム	役職	備考
I (不明)	横浜 FC 香港	社長	関連企業出身
J (35)	横浜 FC 香港	選手	J1-南米-中米-欧州
K (31)	横浜 FC 香港	選手	J1-北米
L (35)	アルビレックス新潟シンガポール	社長	サッカー情報企業出身
M (23)	アルビレックス新潟シンガポール	選手	J1-J2
N (22)	アルビレックス新潟シンガポール	選手	J2-南米-J2
O (23)	シンガポール・ウォーリヤーズ	選手	JFL
C (31)	バンコクグラス FC	選手	J2
A (38)	バンコクグラス FC	育成コーチ	J1-J2-JFL-タイ
P (不明)	チョンブリ FC	セールス・スポンサーシップマネージャー	タイ IT 企業出身

※選手氏名の後の数字は当時年齢

III 結果

1. 2012 年調査

1.1 タイのクラブに在籍する日本人選手

H は、タイのプロリーグで 2008 年度からプレーをした初めての日本人選手二人のうちのひとりである。翌年 2009 年に A と C が加入してくる。H と A は、現在 J リーグアジアアンバサダーとしてアジア諸国のコーチング、橋渡し役として活動している。また A はタイのクラブの育成コーチとして現地に残り、その後 3 部リーグクラブの監督となっている。最初にタイでプレーしたもうひとりの日本人選手はその後インドリーグで、C はタイリーグで現役を続行している。

彼らの活躍の結果、2009 年シーズン途中から「日本人選手がほしい」という声が各チームから上がるようになった。一方、日本はリーマンショックを受けて解雇された選手が溢れていた。当時、A はタイのサッカーについてレポートを日本サッカー協会や J リーグに提出し、日本人選手のトライアウトの場で資料を配布するなどした。その結果、2010 年シーズンは 20 人を超える選手がタイでプレーするようになり、2011 年 5 月現在で 23 人の日本人選手が登録されている。その後、タイのプロリーグには毎年多くの日本人選手がトライアウトを受けて移籍している。（丸山（2011））2012 年 2 月調査の時点でタイのトップリーグであるタイプレミアリーグに 10 人、コーチやフロントとして 3 人、その下部のディビジョン 1 に 9 人、ディビジョン 2 に 3 人が確認されている。

1.2 日本人選手のタイ移籍に関するプッシュ・プル要因

日本人選手を日本のサッカークラブからプッシュする要因になったのは 2008 年のリーマンショックによるクラブ経営の悪化とそれによる選手解雇が一因である。日本人選手の気持ちを惹くプル要因として懇談のなかで聞かれたのが、「本能むき出しのサッカー」といったタイのサッカーに対する魅力である。タイの外国人枠は、2009 年シーズンは外国人枠 4 人、アジア枠 1 人であったが、2010 年シーズンからリーグ戦は 7 人の外国人登録が認められるようになった。ピッチ上は 5 人で控え組に外国人が 2 人となっている。（丸山（2011））ほかにもタイのサッカーの開拓者としての魅力もみられた。A は、自分の移籍について日本のチームで監督の経験のあるタイ人監督のビタヤが獲得を表明したことを挙げた。A は、コーチ兼任であることからアセアン諸国のサッカーを底上げし、指導者としてチャレンジし、日本人監督になることを使命として感

じていた。またAは、「以前であれば、こんな考えはできなかったな〜」と、自分の中に新しい『アンテナ』が構築されてきている事実にもきづかれます。ましてや自分自身が日本人である事を意識したり、日本という国がよく見えてきたりします。外に飛び出す事によって俯瞰してみる事ができ、自分の中に新しい価値観が生み出されているのかもしれませんが」と経験を述べている。(丸山(2011))一方で、21歳のEは、Jリーグ所属経験がないが、タイでの活躍によってさらに上のリーグに移籍するためのステップとして考えていた。

次に、タイのクラブが日本人選手を獲得する理由として、Aは、日本人選手は「真面目」「日本人選手はプロフェッショナルだ」「練習時間に遅れない」「ディシプリン(規律)を尊重できる」「行動で示すことができる」「自分自身と向き合うことができる」「コーチの言葉に耳を傾ける」などをあげている。(丸山(2011))

また日本人選手のタイへの移籍を促進する要因として、タイの生活環境があげられた。外務省によれば2011年10月現在でタイの在留邦人数は49,983人、また旅行者も含めれば10万人近い日本人がタイにいるため、タイ国内に日本人社会も形成され、日本的な生活が可能になっている。日本のJリーグ経験があるBは、タイか日本のJFLを選ぶこととなり、タイのトライアウトを受けて入団しているが、タイは、子どもや家族を連れていけることができる点を魅力としている。また人と出会うチャンスであると肯定的なとらえ方もしていた。Cも同様にタイでなければ会えない人に会うことができることを魅力として挙げていた。実際にコーチをしているFは、タイにある日本企業の駐在員として働いており、2012年の懇談会時点で日本勤務になる旨話をしていたが、タイで活動する日本人選手のまとめ役として彼らの支援をしていた。日本人選手の家族同士の付き合いもあり、こうした日本人ネットワークが移籍先の生活の質の向上に役立っていた。

そのほか日本企業とタイのサッカークラブのスポーツビジネスとしてのつながりも日本人選手を獲得する要因のひとつになっている。タイで開催されるトヨタ・モーター・タイランドが協賛するトヨタプレミアカップではJリーグが招待されている。Cが所属するバンコクグラスFCはKOMATSU、Umay+(アコムの海外事業)が協賛企業となっている。また2012年3月にはセレッソ大阪との提携も締結している。

1.2 Jリーグのアジア戦略

Jリーグが1993年に開幕して以降、日本のサッカー

はW杯4回出場、アジア大会4回優勝その他五輪も5回連続出場、なでしこW杯優勝など目覚ましい発展をみせている。Jリーグのアジア戦略は、かつてサッカー弱国であった日本のサッカーを強化した手法や、アジアでも高評価のリーグ経営手法をアジア諸国と共有することによりアジアサッカー全体の競技力向上と地位向上をめざし、現在アジアから欧州に流れるサッカーに関連する資金の流れをアジア内で循環する仕組みを目標にするプロジェクトである。そしてアジアのサッカーの向上が日本のサッカーの競技力やビジネスにおいても寄与することを目論んでいる。

アジア戦略室は2012年1月に設置され、2月にまずJリーグとタイプレミアリーグとのパートナーシップ協定を締結した。その後、観光庁、経産省を通じて企業とも連携をはじめている。クラブでは、3月にヴィッセル神戸がチョンブリFC(タイ)とセレッソ大阪がバンコクグラスFC(タイ)と提携した。

その後、JリーグアジアアンバサダーにHとAを任命し、タイ、ブルネイ、ミャンマーなどでサッカークリニックを実施してきている。そしてFC岐阜が台湾ナイトと称して試合を実施し、その試合が8月5日に台湾で放送され、横浜FCは香港リーグ1部に横浜FC香港として参入することを発表した。

Jリーグのテレビ放送は、タイ、ベトナム、ミャンマーでも開始されるようになっている。またJリーグのクラブもアジアのクラブとの親善試合や練習試合が多く組まれている。ジュビロ磐田は、ムアントンユナイテッドと提携し、2013年にはジュビロ磐田、湘南ベルマーレ、セレッソ大阪、名古屋グランパスエイトがタイでキャンプを実施している。

1.3 Hのタイ移籍の経験

インタビューで得られたHのコメントをまとめると以下ようになる。

まずタイに移籍しサッカーをする選手は、サッカーを続けたいという希望を持つ人が中心である。しかしタイでサッカーをする時に知らなければいけないのは、アジアのサッカーリーグではナンバー1はJリーグであり、タイはそうではない。もし日本のJリーグに復帰したいという希望がある場合、タイにはJリーグのスカウトが来ないため、J2やJFLでプレーするほうがJリーグ関係者にプレーをみてもらえる可能性が高い。さらに移籍に関わる代理人は、タイへ移籍しても契約金が低額なためにタイへの移籍で交通費をかけてまで同席するなどの経費はかけられない。そのため自分ひ

とりでトライアウトに参加することが必要である。

さらにタイで成功するには、生活環境に慣れるメンタルが必要である。タイに根付くつもりでタイに移籍する意気込みが選手として成功するためには必要である。サッカーをする際にタイ人のメンタリティも理解が必要であり、キャリア形成を考えれば、以上のことから移籍場所はよく考えるべきである。

またHは、スポーツ選手のセカンドキャリアについては、将来的にスポーツという肉体を使ったローテクの世界が社会に求められると考えられるので、サッカーを中心にアジアでもその技術は求められるだろうと指摘した。そうであるならばサッカーの技術を通じてアジアにセカンドキャリアを求めるのも一つの選択肢であるとサッカー選手のアジアにおけるキャリア形成の可能性を指摘した。

2. 2013 年調査

2.1 若手選手のアジアへの移籍とキャリア形成

シンガポールのプロリーグのSリーグに参戦するアルビレックス新潟シンガポール(以下、ANS)に所属する、もしくは過去に所属した選手のインタビューも実施した。ANSは2004年からSリーグに参加しているチームで、シンガポールサッカーの向上への貢献、日本人選手の国際経験を目的としている。選手は全員日本人で、日本でスカウトした選手と、Jリーグのアルビレックス新潟のスポンサーである学校法人のNSGグループが運営する「JAPANサッカーカレッジ」(JSC)の在学者や卒業生から選抜されている。なかにはJリーグの若手選手や契約満了となった選手、また指導者も日本人であり、指導者の育成も行っている。近年はANSから東南アジアのクラブに移籍する選手も存在している。2010年にはポルトガル2部リーグのCFベレネンセスとパートナーシップ契約を締結、2013-14シーズンよりスペインにアルビレックス新潟バルセロナを設立するなど、戦略的に海外のクラブに移籍する日本人選手を育成している。日本人選手の育成機関であるANSは、日本人同士が用意されたフラットに共同生活し、食事はクラブが経営するアルビー食堂^{注1}でとることが可能である。

Mは、ANSについて海外移籍の感覚がなく、日本との差はあまりないと述べた。いっぽうで遊ぶところはなく、サッカーをする環境であり、日本の時よりも怪我が治癒したこともあり実際にパフォーマンスは向上したという。そして自分を見つめなおすきっかけにもなっていた。シンガポールでは、サッカーのスタイル

が違ふこと、グラウンドがデコボコであること、ジャッジも日本と違ふことなど、それを受け入れる自分ができたことは大きな変化であったとも述べた。

Mは、日本人には海外移籍を薦めたいとしている。サッカー選手は試合にでることが大事であり、試合に出られるところへ移籍することを薦めている。J1クラブからANSへ移籍したMであるが、現在も日本代表をめざしていた。結婚の意識はなく、家族を持つことでの意識の変化については語られなかった。また語学について英語は聞いて反応するようになっていると述べていた。

Nは、22歳であるものの、パラグアイの日系ベルマーレに移籍した経験がある。日系ベルマーレは日本のJクラブの湘南ベルマーレとパラグアイの日系人が設立したクラブである。Nは最初の海外移籍先のパラグアイでメンタル的にハングリーであることを学んでいた。また危険な街での行動にも気をつけるなど日本にない感覚も知ったことを述べている。またMと同様、日本にいるときよりサッカーを考える時間が増えたと言う。現在、ANSではとにかく必死であり、結果を出してシンガポールから移籍して出ることが目標となっている。彼の自己分析によれば、自分から話しかけないと始まらない海外に移籍したことで、人見知りの性格が変わったとのことである。このような性格面の変化は海外移籍したことによる影響とも考えられる。

最後にANSから同じシンガポールのローカルチームであるシンガポール・ウォーリヤーズに移籍したOは、ジェフ千葉から契約を切られてプロとしての移籍先がなく、あせっていたこともあり、必要とされていると感じてシンガポールに来ていた。日本にいと外国人とサッカーしないが、海外移籍したことでそれが日常になったことは大きな変化であると述べた。シンガポールのローカルチームに移籍して、日本で思っていた評価とは違うサッカーでの評価、例えば結果や目立つことなどが重視されることを理解することができた。シンガポールに移籍しての収穫は、メンタル・フィジカルにタフになったことであった。M同様、ANSは日本と変わらないことを述べていた。またシンガポールにおいて難しいことはサッカーのスタイルがちがう、コミュニケーションで食い違ふことがあることとしているが、その文化を尊重できればプレーが変わってくるということであった。現在はクロアチア人とルームシェアし、英会話でなんとかしている。もともと、海外志向はなかったものの、とにかくレベルの高い所でサッカーをつづけたいとの思いが強い。また空いた時間は

早稲田大学 e スクールで勉強しており、学ぼうとする意識が行動に表れていた。

2.2 ベテラン選手のアジアへの移籍とキャリア形成

インタビュー調査を実施した横浜 FC 香港 (YFH) は、2012 年度に香港の既存のクラブを買収する形で発足したクラブで、公式 HP によれば、初年度は、香港の 20 代前半の有望選手 (U23 代表・A 代表) をベースに、経験豊富な選手を外国人選手 (日本人 3 人、セルビア人 1 人、モンテネグロ人 1 人) で構成している。今後は、横浜 FC の選手・指導者の交流等も積極的に行い、日本人のカラー・横浜 FC のカラーを全面に出して、香港・アジアのサッカー界を盛り上げていく存在になることを目指したチームである。

横浜 FC 香港では、海外移籍経験が豊富な J、K、そしてもうひとりの日本人若手選手が J リーグの横浜 FC からレンタル移籍で所属している。調査では、J と K にインタビューを実施した。

ベテラン選手に見られるのは、現地の選手、環境に溶け込もうとする意識の高さである。そのためには挨拶、そして語学を学ぶことのこだわりが示された。J は、最初の海外移籍先のパラグアイではスペイン語を辞書で調べるなど努力をしていた。そしてチームメイトからの誘いにはのることや、考えを知るために、感じるためには付き合いが必要であることを強調した。香港在籍の現在は広東語の修得も希望していた。また海外で選手生活を続ける目的の高さが認められた。こうした高い意識がすでに日本にいたときから芽生えていたのかについては、K は海外が意識の変化を生んだことを述べていた。

いっぽう J 1 リーグ選手を得ないでシンガポールそしてタイへ海外移籍した C は、タイに来てみての感想として自分にとってよかったと述べる。日本にいて感じられないこと、異文化、逆に日本の良さもわかり、また特に会えない人と会うことができ、人脈づくりができるということである。C は、生活をタイ語 60% 英語 40% で対応し、タイ人との付き合いもある。タイ語は家庭教師もつけて学んでいた。しかし C は、他の 2 選手とはちがいで、海外移籍したことで日本にいた時と性格が変わったという印象はなく、日本にいた時からこうした資質があったことが示唆される。C の分析では、タイへの移籍は適応力がある人、興味のある人であれば移籍を薦めるが、プライドが高い人はむずかしいと述べた。タイのプレーのレベルも日本の J2 レベルの選手ではむずかしいのではないかと判断で

あった。

そのほか食事に関する適応も必要になるが、香港はアメリカと比較して容易である K は答えたが、シンガポールやタイも共通して食事の問題がないことが日本人選手にはプラスとして働いていた。

3 選手ともに家族を現地に同伴させているが、妻の海外生活への適応力も重要な要素であることが示唆された。実際、K の妻は英会話をこなし、タイの C の妻は現地日本人との付き合いができています。タイでは、家族のいる選手とは家族での付き合いがある。Facebook やブログは人間関係をつなぐ上でとても大事であることが共通している。

引退後のセカンドキャリアであるが、サッカーを突き詰めたいという気持ちから K は現在でも引退後はイメージできないという。また C も将来のイメージは明確ではない。いっぽうで J は日本サッカー協会の指導者資格を取得し、C はアジアサッカー連盟 (AFC) のコーチ資格の取得しタイへの移籍の経験を将来に活かしたいを考えていた。

2.3 クラブ経営者からみたアジアへの移籍

横浜 FC 香港社長の I、アルビレックス新潟シンガポール (ANS) 社長の L、タイのチョンブリ FC のセールス・スポンサーシップマネージャーの P にインタビューした。香港のプロリーグの外国人制限は 6 人登録で 4 人出場である。ANS のシンガポールは外国人チームと言う登録のため全員が日本人、そしてタイは 7 人の外国人登録となっている。

I は、日本人選手の採用基準として「人間性」が一番と答えた。日本人選手獲得には、香港でサッカーをすることに対してどう考えているのかについて電話などで確認したという。そして香港サッカーを盛り上げようとする意識、人に目を向けてもらえるようなことができる人、自分が経験を伝える立場になっていることを理解していることが大事であるということであった。実際、人と話せて、謙虚であることが大事であり、海外の地に順応し、現地ではお手本になり、外国人とともにサッカーができる人、結果的に現地の選手からもリスペクトされる人、プロとしての意識の高い人、ずっと仕事を一緒にしていきたい人が横浜 FC 香港の採用基準であった。特にベテラン選手のなかには香港のサッカーのレベルは下だからと「楽勝だ」と考えるような選手は採用しないということであった。I は、日本人サッカー選手全体についても、「成功する選手は、経営側が助けてあげたいと思う選手であること、契約を切られ

た時など苦しい時にこそ人間性が出てくる。その時の対応が大事である。サッカー界は狭いため選手がどんな選手なのかはすぐサッカー界に伝わるもの」と答えており、サッカー選手として継続して契約を勝ち取るためには単にサッカーのパフォーマンスだけではなく、人間性が大事であることを強調していた。

横浜 FC 香港の事例は、このクラブに移籍することでこうした資質を身につけるのではなく、すでに身につけているベテラン選手が採用されていた。日本人選手は、二人のベテランともう一人 J リーグの横浜 FC からレンタル移籍し海外経験を積んでいる若手の日本人選手がいるが、彼らは小学校を巡回し、小学生に話をしている。若手の村井も巡回活動を行っており、横浜 FC 香港の日本人は 2 人がベテラン、一人が新人で上手い組み合わせになっているために新人の日本人選手の教育にもなっていた。日本人は香港に 2 万 5 千人おり、日本人学校を巡回する機会も香港では準備されていた。

一方で、選手全員が日本人である ANS の L は、「日本の若者が海外に出るべき 7 つの理由」を論じており、日本は人口減少社会であり、今後当たり前に海外に巻き込まれる時代であると述べている。ANS は、今年で 10 周年になるが、当初 2 ～ 3 年はシンガポールで練習して J リーグに帰るのが目的であった。現在はシンガポールへの恩返しの意識でサッカーをし、そして契約を勝ち取って海外に送り出すことが目的となっている。そのため ANS ではサッカー技術を向上させ、シンガポールリーグで優勝し結果を出すことを求めている。ANS で成功する人間性としては、社会性が必要ということである。そして素直でピュアであることが大事である。ANS では、40 歳までの自分の未来予想を書かせている。そしてそれを基に L が直接面接して、目標を見失いがちな選手の意識づけしている。ANS では、海外であることで遊び友達がいないこと、そもそも遊ぶところがないということから、時間だけがたくさんあり、自分を見つめなおす時間になるということである。L は、海外移籍に語学が必要と肩肘張る必要はないと述べ、まずはコミュニケーションを取ろうとする意思があれば何とか伝わることを知ることが大事であるという。ANS は結婚している選手もなく、給与は 7 ～ 8 万円にさらに勝利給を追加すると 15 万円程度であるが、食費や住居費がないためにシンガポールでサッカーをする生活であれば十分である。アジアにおける日本人サッカー選手像をつくってきたのが ANS であり、実際に巣立った選手にはインドネシアで年収 2000 万円

を得るなど成功した選手もいる。日本ではサッカー選手として引退する選手の活躍する場がアジアにはあると述べていた。

最後にタイのチョンブリ FC セールス・スポンサーシップマネージャーである P は、アジアに海外移籍する日本人選手について、タイへの移籍によって人間としてたくましくなると感じていた。また成功しない選手として、「日本だったら・・・」とネガティブに言う人、アジアを下に見る人をあげていた。

これらは海外移籍する以前の資質が重要であるという意見であり、海外移籍してから変わる人もいるが、問題に対して愚痴を言わず前向きになるという性格、目の前の問題をどうするかということを考えられる能力で、結果は大きく異なるという。

アメリカの大学院を修了し、タイの IT 企業に勤務した経験のある P は、同じことが海外に駐在するビジネスマンにも当てはまるという。つまり相手に合わせられる、Cultural Adjustment の能力が大切であるが、素質があっても経験しないと開花できないことでもあり、海外移籍が資質をつくるきっかけになる可能性はあると述べた。

P は、タイにキャンプにきた日本のアカデミーチームを見て、彼ら日本人の親が過保護であることを実感したという。日本人の大人がまず海外に対応していない現状では日本にいては難しいのかもしれない。またサッカー一面においても、タイのレベルが上がってきており、日本代表が強いだけで J クラブがアジアの大会で結果を出していないため、それほど J クラブへのタイ人のリスペクトが高くないことも指摘した。

一般的に、タイの指導者からは、日本人選手は規律（ディシプリン）、まじめという面で来てほしいと思われる。そしてタイは生活しやすく、食事大丈夫という点でもっと日本人サッカー選手が来てもよいのではないかと分析している。またサッカーのゲーム分析においてタイは遅れているため、日本の分析力は重要される可能性が高いという。タイのサッカー選手は生活態度や食事に気をつけないなど、プロ意識は低いいため、日本人監督に来てほしいという希望が実際にあるという。

しかし海外移籍の仕組みが独特であり、タイ流では、経営トップが突発的に選手の採用を決めたり、選手も必ずトライアウトさせたりするなど、エージェントがタイにまで来ない現状では、DVD だけで売り込むことが難しくなっている。そして外国人選手として競合する韓国は、サラリーキャップ制度が引かれており、若

くてよい選手がアジアに流れているため、ベテランの日本人選手には脅威である。またブラジルやアフリカからも外国人選手が来ており、よほどの技術がないとトライアウトを勝ち抜けないのが現状である。

日本人選手の課題は、日本人で固まることが多いことである。現地の人とのネットワークを広げていないことで、日本のサッカー業界の人間が現地人相手の仕事ができていることが日本人のサッカー業界拡大の妨げになっていることを述べた。サッカー選手のセカンドキャリアをタイでという意味で言えば、日本人選手は、話をしないから現地の友達もできない。そのため現地人とのネットワークの弱く、タイに根付くという継続性の面でマイナスであるとのことである。いっぽうアジアでサッカー指導者を目指すのであれば、AFCコーチライセンスの取得などを目指すべきであると話した。

またPは、今後海外に日本人が仕事を広げていくための注意点として、会合では、日本人同士で固まらないこと、海外にいる時は海外にしかできないことを探すことが大事であると述べる。またプライドの高い選手は付き合うのが難しく、やはりパーソナリティの面が重要であると3人の経営者は同様の答えであった。

2.4 指導者としてのキャリア形成の可能性

タイでプロ選手として活躍後、他のチームであるバンコクグラスFCの育成コーチ就任の要請を受けて活動しているAは、コーチとしてアジアで働くことについて、簡単に軽口はたたけないとアジアでコーチにつくことが如何に悩むものであるかを語ってくれた。実際、タイのクラブでコーチとして生計を立てるのもぎりぎりであり、覚悟がないと難しいだろうということである。これまで家族やお金のことで帰国しそうな局面もあったという。そして日本のJリーグで契約できるなら、Jリーグでやったほうがよいというのが彼のアドバイスであった。

現在、彼をタイにつなぎとめているのは、彼が日本人サッカー選手としてタイでプレーした先駆者であり、自分がきっかけとなりやっと自分以外の人が動きだしているところを実感しているからであった。タイのサッカーについて人に話すときは、一時は詐欺師になるのではないかと思ったとのことである。とにかく理屈ではない使命感でやってきていた。そしてアセアンの目が覚めるときにリアルに自分がいられる、今しかない、そして自分ができる役割があると感じたことが彼をタイにつないでいた。タイに残るという最後の決定は

フィーリングであり、論理ではなかったとも述べた。

Aによれば、セカンドキャリアは現役時代考えられなかったという。しかしタイに来て指導者としてのセカンドキャリアを感じている。今は、夢は日本のワールドカップ優勝をみることで、そのためにはアセアンを強くすること、そしてその結果が日本代表の強化にもなると考えている。具体的にはタイ代表監督として日本と戦う。ACLで逆に日本に行くなど、夢はあるという。

日本のサッカーが真にリスペクトされるときは、日本人指導者が海外で活躍するようになったときであると考えられている。タイでの指導経験から得たことは、日本人のメンタリティ、ディシプリンを落とし込みたいが、タイはプライドと縦社会でありタイなりの仕方をして、マイナーチェンジしないとタイ人に受け入れられないということである。指導した結果、現地の人と化学反応を起こさせることが大事であり、如何に指導者の人間に魅力があるかで決まると感じている。また重要なのは、コーチを選ぶにも現地の力学があるということである。

2.5 アジアへの移籍とサッカー選手のキャリア形成

今回のアジア3カ国の調査からアジア諸国に移籍したサッカー選手のキャリア形成とキャリア形成支援について判明したことは以下の点である。

まず、横浜FC香港、ANSは共に日本のJリーグクラブ関係の企業が買収、出資したクラブであり、Jクラブの経営戦略が、国内にとどまらずアジアもターゲットとしていた。横浜FC香港はクラブの責任企業であるLEOCの海外展開、ANSはメインスポンサーの教育ビジネスと連動したものである。これらの企業の海外戦略に協働する形でサッカー選手、指導者、経営者が新たな職場を得ていた。つまり日本企業の経営戦略にサッカー界が相乗りしており、日本企業の経営戦略に見合う資質を持つ選手、指導者、経営者が選ばれていた。具体的には横浜FC香港では、すでに国際的なキャリアを経験したベテラン選手がさらにアジアでのキャリアを得る事例であり、ANSは責任企業の教育ビジネスの成果を達成するために選手への指導が積極的になされていた。

一方でタイの場合は現地のクラブであり、タイのプロ選手として日本人選手の良さをアピールし、現地で認められる形で職場を開拓してきた。初期の段階では日本でプレーしたタイ人監督との細いつながり、個人的な努力による売り込みなどタイへの移籍を促すシス

テム的な支援がない状態であった。その後、Jリーグがアジア戦略室を設置し、タイのクラブとJリーグのクラブの交流が活発になり始めており、個人の努力からJリーグによるアジア移籍の組織的なシステムが稼働しはじめていた。タイにおいては自分を見つめ直す体験が選手引退後のキャリア形成を促す働きをもたらす可能性が示唆された。

IV 考察

近年アジアに海外移籍するトップレベルの日本人サッカー選手が急増している。サッカーの高い技術によって欧州に高額な年俵を得て移籍する事例とちがい、日本でプロサッカー選手の契約を得ることができずにアジアのクラブへ移籍することは、サッカー選手のキャリアを継続させるものの、引退後の生活が保障されるわけではない。こうした選択がむやみに引退時期を遅らせることによるセカンドキャリアのリスクの増大ととらえるか、それともアジアに移籍したことで新たな資質を獲得し、新たなキャリアを歩む糸口となるかについて考察していく。

まず長期にわたりサッカー選手として生き残ることができたベテラン選手の結果からは、アジアの国のサッカークラブへの移籍の経験はプラスであることが示唆された。しかし海外移籍で成功する資質は海外で獲得するのか、それともすでに日本にいたときから素質として身につけているのかについては両方の可能性がある。しかし海外移籍がそうした素質を開花させる契機になることというPの指摘もあった。

いっぽうで若手選手については、遊ぶところがない環境に入ること、日本にいた時よりサッカーを考え、異文化のサッカーに触れることでサッカーに対する考え方にも変化が起きていた。10代にパラグアイへの移籍の経験があるNはパラグアイでの経験を評価し、多くの選手が自分を見つめなおす経験を語っているが、しかしANS社長のLが述べるように目標を見失う選手がいることも事実である。そのためアジアへの移籍の経験をより良いものにし、成功するための資質を開花させるための教育が必要であることが示唆された。また指導や経験が実る形で、日本人選手が主体的に自立していくことでANSをステップ台にしてアジアのクラブに活動の場を広げていく可能性があることがわかった。

日本においては、お膳立てされた環境でサッカーをしてきた選手が、海外移籍によって自分を見つめ、サッカーを通じて新たな人間関係を構築しようとする点は、

引退後のセカンドキャリア問題の解決の糸口にもなるかもしれない。

サッカー選手が現役引退後もサッカーに関わる仕事を続けていくためには指導者や経営者、その他関連のサッカー関連産業全体の拡大が必要である。そのためには現在増えつつあるアジアのクラブで指導する日本人指導者の成功が人的市場の拡大に欠かせないと考えられる。サッカー選手として得たキャリアを活かして日本国内のサッカー関連産業だけでなく、アジアの諸国のサッカー界において仕事を得られるためには、異質の社会を認め、その社会になじむ資質 Cultural Adjustment の能力を持っていることの必要性も示唆された。

調査からAらの移籍は個人的な努力によってなされてきた事例を示したが、日本サッカー協会やJリーグによる海外での仕事を獲得するためのリクルート支援システムの構築可能性も具体的に見えてきた。これまでアジア諸国の代表監督は、日本サッカー協会国際部を中心に関係者を派遣してきたが、指導者資格を発給している技術部が指導者リストを作成し、仕事のない指導者に海外クラブでの仕事を薦めることはシステムとして整備が可能である。特にアジアでのサッカー指導者であれば、アジアサッカー連盟(AFC)発行のライセンスは有効であり、これを取得するための支援も検討に値する。Jリーグのアジア戦略と連動してアジア諸国のクラブとJクラブが提携することでサッカー関係者の相互移動も増加すると考えられる。いっぽうで日本人指導者の進出で受け入れ国側の仕事を奪ってしまうという構造も成立するため、ナショナリスティックな発想からお互いの感情を害することもあると思われる。こうした国民感情も理解できる指導者育成、語学など移籍する相手国選手とコミュニケーションをとる技術など、現在の日本サッカー協会の指導者ライセンスの講義にナショナルコーチ養成のためのキャリア教育プログラムを新たに追加するなどアジアを視点においた指導者育成システムの構築も必要であると考えられる。

V まとめ

本研究の結果、近年アジア諸国の経済的な発展によってプロサッカーが興行として成立する環境ができたことで、アジアにおいて高い技術を持つ日本人サッカー選手、サッカー指導者が起用されるようになったことがわかった。日本人サッカー選手のセカンドキャリア問題を日本国内の失職と転職の困難さとして捉えるだけでなく、新たな職場の創出という観点から、サッカー

業界のアジアへの拡大策がセカンドキャリア問題のひとつの解決策になる可能性が示唆された。いっぽうですべての日本サッカー選手がサッカー指導者やサッカー関連の仕事を得られるわけではない。そのためセカンドキャリアを迎えるにあたって、無事それを乗り切るだけのコミュニケーション力や社会的適応力などの人間性や資質を日本で選手生活をする以上に、海外移籍の経験によって身につけることができるかどうかについては、その可能性を感じさせるインタビュー結果になったものの、そのための海外クラブでの生活指導などのキャリア教育が必要であることも示唆された。

また現在、スポーツ選手のセカンドキャリア問題を解決するために、スポーツ選手が培ったスポーツの技量や知識とは直接関係のない職業への就職斡旋や仕事のマッチングなどの具体的で実践的な支援が現在行われてきた。もちろんそうした実践的な支援システムは大事であるが、今回の調査からはスポーツ選手経験がそのまま活かされるスポーツの職場の開拓、それも国内に限らず海外への職場拡大の可能性が示された。これまでは個々のサッカー選手の努力によって海外への職場開拓がなされてきたものの、海外のサッカーの職場に就職するために有利な国際ライセンスの取得や人脈の形成など、アジアのなかでは比較優位に立っている日本サッカー協会やＪリーグが組織として活動することの必要性も明らかになった。

付記

本研究は平成 22 - 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)『トップアスリートのセカンドキャリア開発システムの構築に関する研究 (課題番号: 22300215)』報告書をもとに研究論文として一部加筆修正したものである。

注

1. アルビー食堂について代表の L がウェブ上で紹介している。<http://www.plus-blog.sportsnavi.com/albirexs/article/111> (2013 年 3 月 6 日確認)

参考文献

- 丸山良明 (2011) タイにおけるサッカー事情 2011, 盤谷日本人商工会議所所報, 07: 1-15.
- 高橋義雄 (2004) 日本人Ｊリーグ選手の国際移籍の要因に関する研究. スポーツ産業学研究, 14 (1): 13-22.
- 高橋義雄 (2011) Ｊリーグにみるセカンド・キャリア・

サポート. 体育の科学, 61 (9): 673-677.

高橋義雄・佐々木康 (2012) 日本人スポーツ選手の海外移動とキャリア形成に関する一考察. 生涯学習・キャリア教育研究 8: 71-78.

吉田誠一 (2014) サッカーでつながる日本とアジアへ下へ, 日本経済新聞, 2014 年 1 月 16 日朝刊, 13 版: 37.

高橋義雄 * 筑波大学体育系 准教授

佐々木康 ** 名古屋大学総合保健体育科学センター教授

The Career Development of Japanese Football players migrating to Asian Countries

Yoshio Takahashi (Associate Professor of Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, Japan)

Ko Sasaki (Professor of Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University, Japan)

Abstract

This study explores what kind of career the Japanese football players have through the migration to Asian football club. The pilot survey was carried out in 2012. The qualitative data was collected with the interview to 6 players, 1 coach and 3 club staffs. The interview was conducted at Hong Kong, Singapore and Thailand in 2013. The result was classified by the young players, veteran players, coaches and club staffs. Firstly, the career in Asia for young players was the opportunity to consider football and experience the football culture. One player said the change of his shy character. But the club manager emphasized the necessity for educational training for the career of young players. Secondly, the playing career in Asia for veteran was achieved the function which extends an international career. They had already played as an international player and were employed by their international experience. Thirdly, the coaching career in at Asian football club is now developing. Because Japanese coaching knowledge and skill have acquired reputation from Asian football developing countries, the opportunity to be a coach would increase. It is very important that the pioneer will success or not. Lastly, the points of which the Japanese manager choose proper players were showed. Two clubs owned by Japanese companies was employed Japanese players by their business strategy. It means that the business strategy of the owner company also influences the Japanese player's migration to Asia. This study suggest that the career development of the Japanese football players migrating to Asian Countries has to be discuss more. Furthermore, it would be necessary to establish the career development program for becoming the international football coach.